[第二回日本言語文化学研究会発表要旨]

日本人の対外国人意識――家庭への受け入れの場合〈中間報告〉

山本　直美
(1991,6,8発表)

現代は、「国際化」「国際性」「国際人」などのように「国際」を冠した言葉がもてはやされている時代である。しかし一方で、一般の日本人の「国際化」の意識の薄っぺらさを憂うる声もある。今日、日本人が外国人と接触する際、その意識構造はどのようであるのか。私はこの点について、外国人を家庭に受け入れるホームステイの場面を取り上げ、外国人が日常生活に参入してきた際の日本人の意識構造を、日本人論及び異文化コミュニケーション論の枠組を用いて明らかにしたいと考えている。その第一段階として、私はホームステイの受け入れ家庭の一般的意識を探るため、3ヵ月以上の受け入れ経験のある家庭を対象にアンケート調査を実施した。今回の発表ではこのアンケート調査に関して、既に回収されていたごく少数(17)の調査票をもとに今後の分析の方向性を探った。そのうちの何点かについて述べると、以下のようである。

まず家庭に受け入れた外国人（今回の調査ではアメリカ人が多数を占める）に対する態度では、無理のない程度ながらも色々と配慮したという回答が、とりあえず自分たちのやり方に合わせてもらおうとしたというものよりも、やや多そうであった。とはいえ、家族の犠牲をも多少はやむを得ずと考えた家庭はほとんどなかった。次に受け入れた外国人に対する親疎の意識を心理学の項目分析法に倣って問うたところ、殆どの家庭が受け入れ期間の初期から終盤期まで、外国人に親しみの気持ちを抱き続けていたことが推測された。但しこの場合には、望ましいと思われる方向に回答が傾いた可能性もある。また同様の方法で、その外国人に対する印象を問うたところ、ほとんどの家庭が外国人を「親しみやすい」と感じながらも、「強情な」「だらしのない」などの項目でnegativeな印象をもちやすいことが予測された。一方positiveな評価は、「思いやりのある」「素直な」「しっかりした」などの項目で現われやすいようであった。

このアンケート調査は、外国人が日常生活に参入してきた際の日本人の意識の一般的傾向について、示唆的な結果をもたらしてくれるものと思う。しかしながら、その際の意識の構造を探るためには、個々の受け入れ場面に焦点を当て、具体的個人に対する受け入れ家庭の複雑に絡み合った思いを分析する必要があろう。今後は、それをインタビュー調査によって試みる予定である。

（お茶大教育学科修士2年）